

2009 秋 黒部下ノ廊下(旧日電歩道～水平歩道)合宿 報告書

【総括】

ヤルツァンポ河大屈曲部探査を夢見る我々温泉好き元探検部員二名は、国内で唯一同様の溪相を呈すると思われる黒部川下ノ廊旧日電歩道～水平歩道にて溪谷部通過の訓練を行った。急峻な谷に設けられた歩道の通過がどのようなものであるかは十二分に体験できたが、針金で持ち手が確保された下ノ廊下ですらビビリまくりの這々の体で、とても”探査“を行う余裕は無かった。まだまだ本番に向けての課題は多いと認めざるを得ない。今後の精進の励みとしたい。

【参加者】 24代 水野(49歳)、26代 杉本(46歳)

【大阪連絡本部】 25代 織田

【行程】

9/20(日) (快晴)	10:45 JR 信濃大町駅発 11:50 扇沢着(通常の倍) 13:00 扇沢発(予約できた最も早い便) 13:20 黒部ダム 14:30 内蔵助谷出合(国立公園内の露営指定地外のためビヴァーク扱い) テント適地は既に先客で一杯のため河原に張る。
9/21(祝) (晴後曇)	6:00 出発 10:20 十字峡 12:30 阿曾原 (以降、概ね1時間行動-10分休憩を予定したが、ザックを安定させて置ける場所が適時になく、かなり変則的になった) 阿曾原小屋にはビールの自販機あり。温泉もまだ空いていた。夕刻にはテント場はほぼ満杯。
9/22(祝) (曇)	4:50 出発 トロッコ混雑の情報を得て、ヘッドランプ点灯で行動開始。 9:15 樺平着 9:37 樺平発～宇奈月(温泉、打ち上げ)～魚津(解散)

【団体装備】

	数量	備考	所有者
テント	1	2～3人用(ダンロップ)	水野
ストーブ	1	EPI (S-1028)	杉本
予備ポンベ	1		杉本
コップエル	1	800cc	杉本
銀マット	1		水野
ろうそく	1		水野
ラジオ	1		杉本
GPS	1		水野
カラビナ	4		水野
シュリンゲ	4		水野
ザイル	1	10m	水野

デジカメ(杉本)

所感～

テントは、ダンロップの2～3人用テントであり、使用頻度も少なく防水性能は大丈夫だが、形が旧式であり、山岳地域の風雨には耐えられ無いものと予想できる。今後、隊にて新しいテントの購入が望まれる。ザイル・カラ

ビナ・シュリンゲは、今回使用しなかったが、ルート of 難易度を考えると、携帯しておいて正解であった。(水野)

※記録写真(当面公開) <http://www.imagegateway.net/p?p=C75MkiQStde>

【個人装備】

一般品	シュラフ、マット、バール、ブキ、着替え、タオル(温泉セット)、ヘッドライト、雨具 コンパス、地図(昭文社 山と高原地図 剣・立山)、ライター、トレペ、携帯電話、筆記具 ナイフ、保険証、持病薬、嗜好品、お金、水筒(2L)、ビニール袋(適)
服装	帽子、長袖シャツ、長ズボン、化繊下着、厚手の靴下、セーターor フリース 手袋、トレッキングシューズ又は登山靴、ロングスパッツ

所感～

今回の季節は、秋口であるが、この季節は年によって状況が変化する。現地の状況を確認して、どの程度の防寒着が必要か考えるべきである。(水野)

【食料】(係:杉本)

	朝	昼	夜
9月20日		大町で買い出し品	アルファ米(ドライカレー、ピラフ)、スープ
9月21日	パスタ、スープ	行動食	アルファ米(おこわ)、スープ
9月22日	パスタ、スープ	行動食	

朝/晩 サタケのマジックライス、マジックパスタ <http://www.satake-japan.co.jp/ja/products/foods/>

夜は一人1.5人分、朝は一人1人分。嗜好品:日本茶ティーパック(6)、お酒(適)

1食あたり行動食:あめ(5)、チョコレート(5)、カロリーメイト(1箱)、一口羊羹(1)

非常食:あんこもち(二食分10枚)、サラミソーセージ(1本、70g)、柿ピー(280g)

所感～

フリードライの食糧は、美味で、1.5人前で充分であった。袋から直接食べる為に、バールも汚れず、軽量化を図る合宿ではとても良い選択と思う。阿曾原の自販機で缶ビール(700円?)を3本も呑んだ。自販機の無い場所あるいは販売していない地域では、粉ビールの開発が望まれる。(水野)

【医療】

基本医療は水野が用意していきます。テーピングは杉本持参。

今回は使用無し。

【会計】 一人分

交通費	信濃大町～扇沢～ダム、樺平～宇奈月	4,500	大町まで、宇奈月からの費用別途
食費・装備	食料、ガスボンベ	2,200	ビール代別途
その他	テント場、温泉	1,000	

下の廊下(旧日電歩道)・水平歩道合宿 雑感

水野浩

2009年9月20日より9月22日の3日間と短期であるが、黒部川の下廊下・水平歩道の合宿を行った。この水平歩道部分については、二十年近く前に、会社の仲間と小屋泊まりの山行にて合宿を行っている。その当時、下の廊下(旧日電道)部分は、ガイドマップに破線で示されたルート、すなわち未整備のルートであった。

今日では、この下の廊下部分は、ガイドマップに実線で表記されており、整備済みで危険マークはあるものの一般ルートとなっている。二十年前に、実際に歩いた訳では無いので、現在までの間にどの様に整備されたかは説明出来ないのであるが、溪谷の岩壁に穿たれた幅50センチほどの歩道は、基本的には変化していないのでは無いだろうか。ただし、岩壁側の滑落防止用ガイド針金や丸太梯子、せり出した丸太歩道は、新しく整備されていた。

この岩壁沿いの歩道は、場所によって高さは異なるが、高い所では60mを超える。ビルの高さで換算すると20階建てぐらいである。このような歩道を荷物を背負い10Km以上も歩くのであるから、長時間の緊張を強いられる。眼下の溪谷や白く渦巻く溪流は美しくはあるが、恐怖が先行して感動をおぼえない。当日は、快晴で、歩道の路面(岩あるいは丸太)は乾いていたが、雨で濡れておれば行動を躊躇したと思う。

我々は、黒部ダムより阿曾原に下ったが、阿曾原より登りのルートを取る登山者も多い。1日目の午後からの行動では、下の廊下上部で多くのパーティーとすれ違ったが、最初のパーティーは元気な若者で、夕方にはシニアの疲労困憊パーティーと云う具合である。1日目には、我々はまだ廊下の厳しさを知らない訳であるが、2日目の行程をもって、その理由が理解できた。

2日目の行程は、廊下の危険部分が多い為に、早朝の出発とした。危険部分での登りパーティーとのすれ違いは少なかった。その後の廊下下部で、すれ違ったパーティーを観察すると、多くがシニアのパーティーであり、小屋泊まりで荷物は少ないものの、体力や技術は大丈夫であろうかと不安を感じた。合宿後の新聞を見ても、事故報道は無いので無事にたどり着いたのであろう。「また行きましょうネ」と話しているかは疑問であるが。

事故と云えば、2日目の1ピッチ目に、深い溪谷を縫う様に低空飛行する県警ヘリコプターを見た。バリバリと大音響をたて、救助用のアームまでも視認できる低空で溪谷の岩峰をかすめ飛ぶ姿は見ているだけで恐怖さえも感ずる。我々がビバークした内蔵助谷と黒部川の合流部にホバリングし、やがて岩峰の向こうへ飛び去った。合宿後に、杉本氏より、内蔵助谷岩壁からの帰還途中に滑落した方の救助だと情報を得た。救助後、亡くなられたそうである。ご冥福を祈るばかりである。合宿中は、その様な事もつゆ知らず今度は、簡単なアルプスの岩壁にでも登ろうかと話していたのだが、意気消沈した次第である。

この合宿に先立ち、8月12日より14日に奈良県大峰山系の弥山川の登山を、安川・門田・織田・水野でおこなった。この登山ルートは、弥山川沿いの未整備ルートで、高低差もかなり有り、渡渉(川を歩いて渡る事)を繰り返し、6時間のコースタイムを10時間かけて幕营地までたどり着いた合宿であった。体力的、技術的に下の廊下合宿よりもハードであったと思う。両方の合宿に参加して、自信も付いたが、合宿参加メンバー全体の年齢や技術・体力をかんがみ、「ヤルツアンポ地域研究部会」と云う名称を改め、「山・川・温泉愛好部会」にする事を提案する次第である。

山中では計画通り模範的ともいえる行程であったが、問題は山以外にあった。まず黒部ダムまでのアプローチ。連休の混雑は予想していたが、扇沢に辿り着くまでに渋滞に巻き込まれるとは思わなかった。次に樺平からのトロッコが往復客で 11 時以降は予約で一杯だと。どちらも事なきを得たが、特にトロッコは阿曾原で情報を得なければ夕方の臨時まで宇奈月に着けないことも考えられた。観光地一般の混雑を念頭に置いて、山だけでなく前後のアプローチについても入念に調査をしておかないと、予想外の事態になりかねない。計画立案者として、山以外での停滞が山での焦り、事故に繋がることもあると反省しきり。

我々はセオリー通り早朝発で昼早めの行動終了を計画し、その通り実行できた。驚いたのは昼過ぎにはガラガラであった阿曾原のテント場が、日が暮れる頃にはほぼ満杯となっていた。どうも 16 時以降に辿り着いた登山者が多いよう。最近感じることであるが、夕方遅くまで、場合によってはヘッドランプを点けてまで行動しているパーティーをよく見かける。そのため夕刻の温泉は芋洗い状態であった由。我々は青空を見ながらゆっくり堪能できた。ちと、熱かったが…(^)。その夕刻の行動が予定の上で無理しているのなら問題ないが、失礼ながらとてもそれに耐えられるような皆様には見えない。結果がそうなら、計画の甘さがあると言わざるを得ない。そう思うと流行のツアーなどに加わる気にはとてもなれない。いくら体力度などの目安をつけてもそれは自己申告でしかない。マッターホルンに登るのにガイドが客をテストするような慎重さが行く山域や計画によっては求められるべきだろう。

憧れの下ノ廊下は予想通りの険路だった。覚悟はしていたものの、せっかくの景色も足下確保に忙しくてほとんど覚えていない。唯一、水平動から見た奥鐘山のみが心に残っている。ハングのある岸壁を自分なりにルートを付け、いつかここを登ってみたいとちょっとファイトが沸いた。幸い好天に恵まれ余裕ある時間に行動を終えられたが、雨で滑るようなら更に時間がかかっただろう。紅葉にはそれこそ絶景になると思われるが、それを味わえる人は一部のエキスパートだけではなかろうか。

沢は、やはり水際沿いに辿りたい。